

先生の祥月命日を一週間先にして、昭和三十二年四月七日、羽田家によつて先生の三周忌が菩提寺興聖寺で営まれた。その朝、東洋史研究會を代表して宮崎、田村の兩人が、先生の親友三島海雲氏を旅館に訪問して、出版資金の援助を懇請したところ、三島氏は即座に快諾を與えられた。こうして出版事業は漸く軌道に乗ることになった。

五月九日、羽田博士史學論文集の編纂出版委員會を人文科學研究所で開き、上下二冊として毎年一冊を刊行することにし、上巻歴史篇の實行委員として宮崎市定、神田喜一郎、貝塚茂樹、森鹿三、内田吟風、佐伯富、日比野丈夫、下巻宗教言語篇の委員として田村實造、鴛淵一、塚本善隆、安部健夫、野上俊靜、小野川秀美、藤枝晃、佐藤長を挙げ、佐伯と佐藤とは共通に會計、庶務を掌ることになった。こうして發足した實行委員會は幸にして順調に事業を進行させてきた。印刷は先に「羽田博士頌壽記念東洋史論叢」を出した内外印刷株式會社に依頼した。

羽田博士の學風における最大の特長は、その豊富な語學力を歴史學に應用した點にある。先生はいつも、語學は學問上の武器だと言つて居られた。そこで先生の著作を歴史篇と宗教言語篇に分けて見たのは全く便宜上の手段で、先生の論文は全く歴史的な題目の研究にも言語學的な考察が含まれ、同時に言語學的問題も終極の目的は歴史事實を明かにするに主眼をおいて研究されている。いま世に送る歴史篇は、比較的純粹な歴史學に近いものを選んだのであるが、讀者は恐